

[論文]

3・11後の世界に生きる：被災地にある キリスト教大学の課題*

原 口 尚 彰

1. はじめに
2. 東日本大震災の発生と初動体制の問題
3. 電源・通信手段の回復と非常時の生活への対応
4. 事態の落ち着きと大学の対応
5. 震災から一年：復興・復旧と大学の課題
6. 結論に代えて：復興期における宗教の役割

1. はじめに

東日本大震災の勃発後、既に1年半の時間が経過しようとしている。この大震災の持つ意味については、地震学や防災学等の科学的視点から問うことも、震災がもたらした社会へのインパクトを社会科学的視点から問題にすることも、思想的・宗教的視点から考察することも出来る。震災後半年の時点で、私は「東日本大震災と社会意識の変容：人間学的考察」という論文を書き、大震災が人間の意識にもたらした影響の全体像を出来るだけ客観的に描くことを試みた¹。今回は、震災後の復興・復旧が進む中で、被災地にあるキリスト教大学に奉職する者の視点から、起こったことを時系列に沿って振り返りながら、被災地におけるキリスト教大学の課題や、宗教の果たす役割について検証してみたい。

2. 東日本大震災の発生と初動体制の問題

地震発生時の状況

2011年3月11日14:46に東日本大震災が起こった時、東北学院大学の全学教授会が

* 本稿は、2012年7月28-29日に青山学院大学青山キャンパスで行われた、東北学院大学・青山学院大学合同チャプレン会議において行った発題の原稿に加筆したものである。

¹ 原口尚彰「東日本大震災と社会意識の変容：人間学的考察」『人文学と神学』第1号（2011年）75-114頁を参照。

土樋キャンパス5号館5階の第1会議室で開催されていた。当日の主要議案である、一般後期入試判定案と卒業の追加認定案を承認して数分経ったところで、強い揺れが会議室を襲い、議事が中断した。防災学を専門とする宮城豊彦教授（教養学部地域構想学科長）が、「皆さん机の下に隠れて下さい」と大声で叫び、出席していた教授達の多くはその指示に従ったが、椅子に放心したように座ったままの人たちもあった。大きな揺れがかなり長く続いた後に、小さな揺れがひっきりなしに続き、東北地方のどこかで大きな地震が起きたと直覚したが、その時点ではそれ以上のことは分からなかった。間もなく、ハンドマイクを使用しながら、指定避難場所への避難を繰り返し勧める職員の声が校庭から聞こえたので、教授会は散会となり、教授達は会議室を出て階段を降り、通りの向こうの東北大学のテニスコートへ避難した²。暫く皆でそこにおいて、余震が静まるのを待ったが、地鳴りがして非常に不気味な状態が続いた。指定の場所に避難するところまでは、予定の行動であったが、それから先は何も決まったマニュアルがあるのではなく、また、大学執行部が何かの指示をする訳ではないので、今後どう行動するかはそれぞれの教員の判断に任された。多くの教員が行ったのは、携帯電話で家族と連絡を取り、安否確認をすることであったが、通話が殺到し、電話は殆ど通じなかった。しかし、メールやフェースブックは当初は通じていた。余震が少し下火になって来た頃に、教員達は三々五々帰宅の途についた。停電になり、電車は止まっているし、交通信号が止まり、道路は大混乱ということであったので、教員達の多くは歩いて帰宅した。私は車を大学の駐車場に置いたままにして、徒歩で1時間かけて帰宅した。その途上に、防災頭巾を被って母親に手を引かれて帰宅する小学生達の列と出会ったが、パニックには陥っておらず整然としていた。交差点の信号は消えており、確かに道路は大渋滞であった。しかし、宮城県警の交番がある大町の交差点の信号は特別な補助電源があるのか、信号機が点滅していた。

土樋キャンパスで帰宅が困難な教職員や学生達は、総務課職員の指示に従って、大学体育館の方へ移ってそこで与えられる毛布や緊急用の糧食を頼りに一夜を過ごすことになった³。また、そこには自宅が危険な状態になった近隣住民も避難して来た。他方、多賀城にある工学部にも、津波が近くまで押し寄せて来たが、少し高い位置にあったキャンパスを飲み込むことはなかった。多賀城市の要請によって、工学部は津波によって住居を失った住民達の避難所として礼拝堂を開放し、教職員がその世話にあたることとなった⁴。

² 「ドキュメント3・11」『東日本大震災 東北学院の復旧へ向けての取り組み』HP『東北学院大学』を参照。

³ 同上。

⁴ 同上。

大学の幹部達は、その夜に災害対策本部を設置し、大学に泊まり込んで緊急対応にあたることになった⁵。災害対策本部長は学長であるが、運営の実際の責任者は総務担当副学長の柴田良孝氏であった。災害対策本部の決定や方針は、通信が途絶している状況下では、学科長や個々の教員には全く伝えられなかった。そこで、当分は徒歩で大学と自宅の間を往復し、随時行われる大学の決定を聞こうとしたが、当初は検討中という言葉の他は明確な方針が聞けなかった。

余震の中で：震災後の事態への対応

震災後に帰宅後は、まず、家の被害状況を確認した。マンションの外構部分の下水管が破損していたり、外壁や柱に多少のひび割れはあっても、建物本体は基本的に無事であることが分かり、近所の小学校に設置された避難所には避難せず、自宅に留まることになった。まず、震災直後は通じていた電話で家族と連絡を取り、無事を確認したが、その後間もなく固定電話も携帯電話も全く通信不能となった。以後は、停電中も使用可能であった公衆電話の前に並んで、必要な連絡を行った。この時期の情報源は、電池式の携帯ラジオであり、点けたままにして情報収集と情勢判断に努めた。この時点で、初めての、今回の地震が三陸沖から宮城県沖を経て福島県沖、茨城県沖にかけての海溝で起こった地震であり、マグニチュードが8を越えることや、沿岸部に大津波が押し寄せ、仙台市の若林区荒浜地区や南三陸町や気仙沼市や石巻市が壊滅状態になり、多くの犠牲者が出ており、生存者の救援活動や遺体の回収作業が続いていることを知った⁶。

地震による停電の中で福島第一原発が外部電源を失い、起動したディーゼル発動機による補助電源も津波によって破壊されたために、冷却システムが働かず、原子炉内の温度が高くなっていることもラジオニュースによって知った。数日後には福島第一原発第一、第三、第四号機では、水素爆発が起これ、政府は原発周辺20キロメートルに居住する住民に避難指示を出した⁷。仙台は福島第一原発から約100キロメートルのところにあるので、当然大気中に放出された放射性物質が風に乗って運ばれてきて、雨で地上に降って来るこ

⁵ 同上。

⁶ 当時のマスコミの報道状況については、『河北新報』2011年3月11日号外、同3月12日朝刊・夕刊、『朝日新聞』2011年3月11日号外、同3月12日朝刊・夕刊、『讀賣新聞』2011年3月11日号外、同3月12日朝刊・夕刊を参照。被災しながらも報道を中断せずに続けた河北新報編集部の労苦については、河北新報社編『河北新報のいちばん長い日 震災下の地元紙』文藝春秋社、2011年を参照。

⁷ 『河北新報』2011年3月13日朝刊、『朝日新聞』2011年3月13日朝刊、『讀賣新聞』2011年3月13日朝刊を参照。

とが予想され、窓が開けられず、洗濯物を外に干せない状態となった。しかも、原子炉の炉心のメルトダウンが進み、もっと大量に放射性物質が放出されれば、仙台も居住不能になる恐怖があった。

電気とガスが止まり、水道も1階までしか来ていない状態の中で、まずは生き延びるための水と食料の確保が問題であった。人間が「パンによって生きている」事実は否定できない。しかし、緊急用の水と糧食は自宅のロッカーに備蓄しており、当面は大丈夫であった。電灯は点かないので、蠟燭を点けたが、非常に暗く、生活活動は実質上夜明けから日没までに限られ、近代以前の人たちと変わらない生活であった。昼間は余震に揺さぶられながら、割れた食器の片付けや、倒れた本立てや散乱した蔵書の整理する傍ら、窓の近くの明るいところへ行って本棚から転げ落ちてきた古い本を読んだ。夕方になり、暗くなったら燭下の食事を済ませて、夜空を眺めて物思う時を過ごした。震災後は停電で町が暗いし、燃料不足で自動車も通らない状態であったので、空気が澄み切っており、星が綺麗に見えた。「國破れて山河あり 城春にして草木深し」という杜甫の詩の一節も浮かんできた。また、今回の地震が30年以内に99%起こると言われていた宮城沖地震ではなく、千年に一度という大地震であることが分かってくるにつれ、人間は自然をコントロールは出来ないということも思った⁸。

震災から二日後の3月13日が日曜日であったので、礼拝のために日本基督教団五橋教会へ出掛けた。自動車はガソリン不足で使えない状態であったので、不定期で運行を開始した市バスを拾って市の中心部へ行き、そこから歩いて教会まで出掛けた。この時は作業衣を来て、軍手や水や非常用の食料を持って行った。教会は外壁の一部に損傷はあったが、建物全体としてはダメージが少ないようであった。牧師夫妻は無事であったが、震災当日は、付属施設のこども園の子供達の安全を確保し、子供を引き取りに来る保護者達との連絡が大変であったとのことであった。

時間になって日曜礼拝が始まったが、停電で礼拝堂が使えず、2階の集会室に蠟燭を灯しての礼拝となった。いつもは80人を越える出席者があるが、その日は20人位の出席であった。集まった人たちは互いの無事を喜び、それぞれの状況を語り合った。中には、住居が危険になったので避難所で生活している人たちもいた。震災による破壊を見聞して、神も仏もないということを感じたというノンクリスチアンの知識人とは対照的に、キリスト教徒の中には震災で信仰を失った人よりも、震災を契機に信仰深くなった人の方が多

⁸ 今回の地震の規模については、当初はM8.8とされたが、後にM9に変更された。

かったように思う。人間の予想や力を越える自然現象が起こった時に、信仰を持つ者は人間の力を越えた存在に頼ろうとする気持ちが強くなったのであろう⁹。この日の通常の礼拝は短く切り上げられ、参加した全員が祈りを捧げる祈祷会が持たれた。その時、多くの人たちは震災の中で生き延びることが出来たことを感謝し、被災した人々への助けを祈り、救援活動に携わる人々への上よりの支えを祈った。数人の人々は、震災は神様の人間への警告であるとして、エネルギーを浪費し、自然を破壊して来たことへの懺悔の祈りを捧げた。その時私は、一般信徒が抱く思いの中に震災天罰論は未だに生きていることを感じた¹⁰。

この時点では、他の教会の状況は良く分からなかったが、後に日本基督教団事務局や東北教区を通して、東北地区の教会の被災状況が伝えられてきた¹¹。それによると、福島教会や岩沼教会や長町教会は、地震で会堂が大破し使用不能になったということであった。また、東北教区や奥羽教区に属する沿岸地区の諸教会の中には、会堂や牧師館、附属幼稚園が津波を被ったり、会員が津波の犠牲となったところもあった¹²。内陸部にある教会は、比較的被害が軽く、自らの被災からの復旧を図りながら、他を支援する立場にあることが次第に明らかになって来た。

3. 電源・通信手段の回復と非常時の生活への対応

コミュニケーションの回復

3月13日の夕方、停電が終わり、電源が二日ぶりに回復した。一個の電球の光の明るさをこの時ほど感じたときはない。太平洋戦争が終戦になり、夜間爆撃を避けるための灯火管制が解除されて、電気を自由に点けることが出来るようになって戦争が終わったのを実感したと母親が生前によく言っていたことを思い出した¹³。電源が回復するとニュースをテレビで観ることが出来るようになり、石巻や気仙沼などの沿岸地域の町が真っ黒い津波に飲まれて行く光景を繰り返し観ることになった。また、津波が退いた後、町並みが消え去り、建物の土台だけになった姿を目にすることになり、写真で見ていた戦争直後の焼

⁹ 『信徒の友』編集部編『その時、教会は——3.11後を生きる』日本基督教団出版局、2011年、87-102頁に収録されているアンケート「3.11後を生きる私たちの信仰」の集計結果を参照。

¹⁰ 日本基督教団救援対策本部編『現代日本の危機とキリスト教 東日本大震災緊急シンポジウム』日本基督教団出版局、2011年、149-150頁に再録されている参加者の発言を参照。

¹¹ 日本基督教団東北教区に属する教会の被災状況については、『日本基督教団東北教区第66回総会議案・諸報告』（2011年5月24-25日）63-74頁、「教会被災状況」『日本基督教団東日本大震災 救援・復興支援』HP『日本基督教団』を参照。

¹² 同上。

¹³ 第二次世界大戦中に実施された灯火管制については、「灯火管制」HP『ウィキペディア』を参照。

け野が原に似ていると思った¹⁴。

電源の回復は、電話やインターネット回線の回復を意味していたので、早速、外部との交信を再開した。まずは、家族・親族との連絡を行ったが、次に、キリスト教学科教員と連絡を取り合いながら、学生の安否確認作業に取りかかった。学科名簿を頼りに次々に電話を掛け、三分の二の学生の無事は直ぐに確認出来た。本人と連絡出来た場合もあるし、家族を通して無事を確認出来た場合もあった。安否確認が出来なかった学生については、メールを送って自分自身や友人の安否についての情報提供を求めた。電話とメールによる安否確認作業は、毎日繰り返し行っており、一週間後に完了した。学生の全員が無事であることが判明すると、直ぐにそのことを学科教員学生と学生部に伝えた。大学全体では、学生の安否確認は学生部が担当していた。地震直後に学生部は、学生の携帯電話にメールを送る安否確認システムを作動させていたが、このシステムで安否確認出来た学生は総数の2割程度に留まり、職員たちが分担して手作業で学生の安否確認することが続いた¹⁵。作業が完了するのは震災発生の3週間後となり、3名の学生の死亡と2名の行方不明が確認された¹⁶。不思議なことに、グループ主任の教員を通しての安否確認作業はなされず、教員と職員の協働ということでは課題を残した。

この時は、様々な知人・友人から安否確認や励ましの電話やメールを戴き、人間の繋がりの大切さを思った。特に、近隣の韓国の友人のみならず、ヨーロッパやアメリカからも安否確認のメールが届き、地球人としての一体性ということを感じ、随時感謝のメールを送り続けた。私が属する諸学会関係者からのメールも多かったので、それぞれの学会事務局宛に近況報告のメールを送り、会員全員に配信して貰った¹⁷。

他大学関係者からは、何か出来ることはないかという支援の申し出も複数あったので、災害対策本部の実務を担当していた柴田副学長にその都度伝えて対応をお願いした。この件については、佐々木俊三学長室長と社会福祉が専門の阿部重樹教授と辻秀人学生部長の3人が中心になって、対応を具体的に検討するということであった。特に、青山学院大学関係の人々は救援物資をトラックに積んで来訪し、支援の申し出を行った¹⁸。外部からの

¹⁴ 当時の被災地の情景については、仙台放送制作『テレビカメラが見た東日本大震災』（DVD & ブックレット）、販売：扶桑社、2012年、朝日新聞社『東日本大震災 報道写真集 2011.3.11-4.11』2011年、河北新報社編『3・11大震災：国内最大M9.0 特別報道写真集』2011年を参照。

¹⁵ 「ドキュメント3・11」『東日本大震災 東北学院の復旧へ向けての取り組み』HP『東北学院大学』を参照。

¹⁶ 同上。

¹⁷ 巻末の参考資料1を参照。

¹⁸ 「ドキュメント3・11」『東日本大震災 東北学院の復旧へ向けての取り組み』HP『東北学院大学』を参照。

支援の申し出に対して、大学としての対応が目に見える形で始まったのは、3月29日に災害ボランティアステーションが立ち上がり、被災地に教員・学生のボランティアを送り出し始めてからである¹⁹。

3月15日（火）に大学のHPが回復すると、大学の災害対策本部の決定が随時告知されるようになって来た。大学HPが最初に行ったことは、学長と理事長の追悼と励ましの言葉の掲載と卒業式や入学式などの主要行事の中止の告知であった。そのうちの卒業式中止の件については、14日（月）午後大学へ行って大学の幹部に聞いたところでは、翌15日の午前中の会議で決定することになっていたが、14日（月）夕刻に既にラジオ放送が、東北大学と東北学院大学が卒業式の中止を決めたというニュースを流していた²⁰。この情報の混乱の真相は未だに不明である。

キリスト教学科について言えば、学生の安否確認の後に、学科の公式行事である修養会や卒業礼拝・祝会の中止の決定をして、教員・学生に通知をしなければならなかった。重要行事の変更は通常ならば、学科会議で決定しなければならない。しかし、大学が閉鎖され、交通も困難で会議が開けない事態であったので、当時仙台にいて連絡がついた教員と相談した上で中止を決定し、大学のHP上に掲載した上で、学科教員・学生へメールで連絡し、後に開かれることになる次回学科会議で報告・了承する手続きをとった。修養会に関しては会場のホテルにキャンセルの旨をメールと電話で伝えた。修養会や卒業礼拝・祝会の中止のお知らせは、最初は大学のHPのトップページに掲載され、暫くしてから、学科の頁のところの下ろされることになったので、学科の教員・学生だけでなく、被災した教員・学生全体への慰め励ましとなるような言葉も添えておいた。

陸の孤島仙台

仙台市は沿岸部の荒浜地区が津波に襲われて数百人の水没者を出した。仙台港の岸壁も壊れ、港近くにあった製油所のタンクが炎上して燃え続けた²¹。海に近く位置した仙台空港にも津波が押し寄せ、滑走路と空港ビルが浸水した²²。空港は3月17日に米軍が復旧作

¹⁹ 「災害ボランティアステーション」HP『東北学院大学』を参照。

²⁰ 大学の公式の記録では、3月15日に災害対策本部が、卒業式及び入学式の中止を決定したことになる。「ドキュメント3・11」『東日本大震災 東北学院の復旧へ向けての取り組み』HP『東北学院大学』を参照。

²¹ 『河北新報』2011年3月13日朝刊、『朝日新聞』2011年3月13日朝刊、『讀賣新聞』2011年3月13日朝刊を参照。

²² 同上。

業にあたり、一部が使用可能となった²³。しかし、再開後の空港は救援のための軍用機や政府関係者の使用に限られていた。一部の民間機が使用できるようになり、臨時便が飛ぶようになったのは一ヶ月後の4月13日であった²⁴。国内定期便の復旧はさらに遅れて7月25日のことであった²⁵。

内陸部は津波の被害はなかったが、鉄道や高速道路等の交通網が寸断され、陸の孤島のようになった。道路にひび割れやくぼみが出来たので、東北自動車道路は数日間、通行不能であった。鉄道も地震で線路や配電施設が大きなダメージを受け、二ヶ月後にやっと復旧した。首都圏に行くときは、初めの数日間は、山形空港へバスで行き、そこから空路羽田へ向かうか、新潟まで高速バスで行ってそこから新幹線に乗っていた²⁶。その後、応急復旧工事が完了し、東北自動車道が緊急車両に限って再開されると、仙台駅東口より新宿行き的高速バスが出るようになった²⁷。仙台駅裏の高速バスの切符売り場には長蛇の列が出来、雪がちらつく中に2時間程並んでやっと切符が買える状態であった。高速バスに乗ると、段差を越える時に大きく揺れるし、行き交う車両はカーキ色の軍用車両か、救援隊や救援物資を運ぶトラックしかないので、緊張感が漂っていた。しかし、高速を降りて赤羽あたりに来ると日常生活が平穏に営まれている光景が目に入り、不思議な感じがした。

生活人としての対応

震災から一週間経つと、近くのスーパーマーケットが、時間を限定して営業するようになった。事務所も会社も学校も閉鎖されていたので、仙台市民は皆リュックを背負って店の前に長い行列を作って順番を待つのが日課となった。水と食料の確保が急務であったが、店の棚はガラガラでその日に入荷したものを手当たり次第に買い込んで帰るしかなかった。カセットコンロのボンベや電池は個数が限られ、入手が困難であった。また普段は余り人が入らない個人商店の前にも人の列が出来た。このような体験は短期間であったが、戦後の食糧難の時代の経験を思い起こすこととなった。また、冷戦時代の東欧で生活物資がなく、何でも列を作って並んで買い物をしたということも思い出した。ずっと以前に東欧の友人からは、人の列が見えると何か買えると思って後ろに並びたくなるということ

²³ HP『日テレ News24』2011年3月16日の記事、『河北新報』2011年3月17日朝刊を参照。

²⁴ HP『日テレ News24』2011年4月13日の記事を参照。

²⁵ HP『日テレ News24』2011年7月25日の記事を参照。

²⁶ 『朝日新聞』2011年3月14日朝刊を参照。

²⁷ 「プレスリリース（第13報）東北地方太平洋地震に伴う高速道路の状況について（東北支社）」HP『NEXCO 東日本コボレートサイト』を参照。

聞いていたが、そうした気持ちが少しは分かるような気がした。

4. 事態の落ち着きと大学の対応

震災後、大学の建物の安全確認が済むまでの間は、大学の教室や研究室は立ち入り禁止となり、大学は閉鎖状態になった。しかし、2週間程経つと建物の安全確認が進み、損傷が激しい一部の建物を除いて大学構内に立ち入りが可能となり、教員は自分の研究室の片付けを始めた。この頃になるとさすがに大学の対応方針が定まって来て、明確な指示が出て来るようになった。大学理事会は3月30日付けで「東北関東大震災からの復興に向けた基本指針」を発表した²⁸。この指針は、建物・設備の修復、学生・生徒の精神的・経済的支援、復興予算を捻出する必要性、五橋整備計画の一時凍結、広報活動の強化の必要性等について包括的に述べている。この指針に従って、東北学院大学は復興・復旧に向けての具体的歩みを始めるに到ったが、全体としては財務部の対応が際立って迅速だった。被害を受けた建物の修理の発注のための予算措置が速やかになされると共に、保護者が被災し、経済状況が悪化した学生のための学費の減免、また、災害特別奨学金の給付などが決定され、直ぐに実行に移された。また、復興予算捻出のために大幅に経費を削減した補正予算が組まれた²⁹。建物の修理について言えば、授業再開に向けて事務棟と教室の復旧・修理が優先され、研究室の復旧は後回しになり、教員は自己責任で研究環境を整えることを余儀なくされた。4月7日夜に宮城県沖を震源とするM7.4の大きな余震があり、その揺れで研究室の本棚の蔵書と自宅の書斎の蔵書が再び散乱し、再び数日掛けて整理することになった³⁰。

学務関係では、2011年度の学事歴や教務日程が再編され、4月27日(水)-30日(土)に新生オリエンテーションを土樋キャンパスで行い、通常の日程から一ヶ月遅い5月9日(月)に新年度の授業を開始することが決まった。授業回数は震災後の非常時であるので、前期は通常より少ない13回とすることや、授業回数を確保するために試験期間を設けないことも決まり、授業再開のために具体的準備が始まった。

東北学院大学には、学生の自主的な課外活動としてセツルメント会があり、奉仕活動を続けていたし、大学の正規科目として「ボランティア論」も設置されていたが、大学の機

²⁸ 平河内健治理事長「東北関東大震災からの復興に向けた基本指針」2011年3月30日を参照。

²⁹ 関谷登「平成二十三年度予算及び東日本大震災に伴う補正予算の編成について」『東北学院時報』第702号(2011年4月15日)4頁を参照。

³⁰ 4月7日に起きた余震については、『河北新報』2011年4月8日朝刊、『朝日新聞』2011年4月8日朝刊、『讀賣新聞』2011年4月8日朝刊を参照。

関が業務としてボランティア活動を斡旋することは行っていなかった。しかし、2010年秋には、佐々木俊三学長室長が大学にボランティアステーションを設ける構想を打ち上げていた。今回の大震災を受けて、この構想が一気に現実化し、3月29日に災害ボランティアステーションが設置され、仙台市社会福祉協議会等の外部の支援組織との連絡を取りながら、教員・学生をボランティアとして沿岸部の被災地へ送り出す作業を始めた³¹。緊急時であったので、活動の開始が先行し、ボランティアステーションを設置・運営するための規定が教授会で承認されたのは、ずっと後の8月9日であった。支援の申し出があった他大学からのボランティアも、このボランティアステーションが奉仕先を斡旋した。キリスト教学科・総合人文学科の教員・学生も、ボランティアステーションを介して奉仕活動を行った。活動開始当初の業務は、避難所の世話や、沿岸部で津波の被害に遭った家の瓦礫の撤去やヘドロの掻き出しが中心であったが、次第に子供達への絵本の読み聞かせや、学習指導や、仮設住宅での傾聴活動や、被災者を取材して情報を発信する情報ボランティア等の業務も行うようになった。

4月18日（月）には、全学の教職員が参加する復興に向けての全学集会在土樋キャンパス5号館第1会議室で開催され、冒頭で犠牲者への追悼の時を持った後に、復興に向けてのスピーチが理事長と院長・学長によってなされた³²。5月9日（月）になり、いよいよ新学期が開始されたが、キャンパスの至る所に建物の修復のための足場が組まれ、機械の音が響く中で、さながら工事現場の中での授業再開であった。普段のように粛々と授業をすることが第一の課題であったが、学生の欠席や遅刻も多く、落ち着かない様子であった。授業を担当する教員としては、急がずに授業をゆっくりとしたペースで始めることを余儀なくされた。心理療法の専門家である堀毛裕子教授（カウンセリングセンター長）は、心に深い傷を負った人たちのケアの原則として、生々しい体験を思い出させるようなことは極力避けた方が良いという助言を大学の教員達に対して行った。具体的には、震災の中で、家が壊れたり、津波に流されたり、家族を亡くす体験をした学生もいる中で、授業で震災に言及して生々しい話をするのは避けた方が賢明であるということであった。そこで、私は授業において震災体験に結び付けた話をするのはあまり行わなかった。

授業は始まっても、教員の研究環境は殆ど整っていなかった。特に大学図書館の被害は大きく、窓口業務を震災後暫く停止していたので、研究資料を検索して借り出す基本的な

³¹ 「災害ボランティアステーション」HP『東北学院大学』を参照。

³² この時になされた挨拶とほぼ同趣旨の理事長及び院長・学長の言葉が、『東北学院時報』第702号（2011年4月15日）1頁に記されている。

作業が出来ない状態が続いた。大学図書館のレファレンス業務が完全に回復し、他の研究機関から資料を取り寄せることが出来るようになったのは、9月末であった。資料収集と研究活動を本格的に再開出来るまでの時期は、私は専門の研究を進めるというよりも、千年に一度の大震災の経験の意味を、人文学の立場から考えることに時間を費やしていた³³。新聞や雑誌やインターネットを通して得られる情報の他に、阪神淡路大震災について書かれた文献や、関東大震災の関連の文献も参照したが、暫くは、いち早く震災後一ヶ月で業務を再開した宮城県立図書館に通って必要な文献を入手していた。

大震災後に女川原発が停止状態になったことに加え、仙台港に立地した火力発電所が損壊し操業不能となったために、東北地方も電力不足に襲われた³⁴。経済産業省は夏の電力消費時に停電を回避するために、電力の需給見通しを発表して、大規模な事業所や学校に、15パーセント以上の節電を要求した³⁵。東北学院大学に対しても節電義務が課されたので、エアコンの設定温度を28度に上げること、室内や廊下の照明のレベルを落とす等の節電対策がなされ、目標を達成した。夏の暑い教室の中で、学生達と一緒に団扇や扇子で涼を取りながら、授業を続けていた記憶がある。

総合人文学科は、2011年4月1日に発足したが、震災直後のことであり、入学式も新入生歓迎会もない出発であった。しかし、当初の予定から一ヶ月遅れた6月18日（土）に泉キャンパス礼拝堂において創立記念礼拝を行い、その後に会場をコミュニティセンター2階に移して祝会を行った³⁶。この時は、新学科の教員・学生のみならず、理事長や学長をはじめ大学の幹部達も参列し、新学科の創設を大学を挙げて祝うこととなった。

9月10日（土）午後には、東京大学の姜尚中教授を招いて東北学院創立125周年記念・総合人文学科創立記念講演会が、土樋キャンパス8号館の押川記念ホールと841番教室、842番教室を会場に行われ、約700人の出席があった³⁷。姜尚中教授はベストセラーの『悩む力』の著者である³⁸。しかし、今回は、震災半年後の被災地での講演であるので、希望を語るという意味をこめて「生きる力」という題で話をし、聴衆に深い感銘を与えた。本講演会は河北新報と共催であったので、講演内容は河北新報紙に全文掲載された。

³³ 原口尚彰「東日本大震災と社会意識の変容：人間学的考察」『人文学と神学』第1号（2011年）75-114頁を参照。

³⁴ 『河北新報』2011年3月16日朝刊、『朝日新聞』2011年3月16日朝刊、『讀賣新聞』2011年3月16日朝刊を参照。

³⁵ 「夏期の電力需給対策について」（2011年5月13日）HP『経済産業省』を参照。

³⁶ 『東北学院時報』第704号（2011年7月15日）1頁を参照。

³⁷ 『東北学院時報』第706号（2011年11月15日）1頁を参照。

³⁸ 姜尚中『悩む力』集英社新書0444C、2008年を参照。

震災後の時期とキリスト教

震災後の時期に、宗教部による対外的な活動はあまり見られなかった。宗教部は損傷を受けた礼拝堂やパイプオルガンの修理の問題や、授業開始後に再開した毎日の礼拝を行うための準備に専念していた。特に、土樋のラーハウザー礼拝堂は天井の一部が剥落して危険な状態になり、修復に半年の期間が必要であった³⁹。泉キャンパスの礼拝堂の被害は軽微であったが、パイプオルガンが損傷し、2度にわたりフランスからオルガン職人を呼んで修理しなければならず、10月末になってやっと修理が完了した⁴⁰。

土樋キャンパスでは礼拝堂の修理が完成するまでの間は、6号館1階の大教室で礼拝を行っていた。階段教室であったので、講壇を会衆席が取り囲むすり鉢型の空間の中で礼拝を行い、伴奏は小型の移動型オルガンを持ち込んで行った。会衆が起立をすると一斉に座席が持ち上がり、パタパタと音がするのがユーモラスな感じであったが、説教者と会衆が近いので、アイコンタクトを取るのは通常の礼拝堂よりも却って容易であった。

大震災の後の時期であったので、説教者の関心は自ずと震災の体験に向かっていたが、先に述べたようにスクールカウンセラーから、深い心的外傷を負った学生のことを考え、震災の辛い体験を思い出させるような発言を教師は極力避けるようにという助言が与えられていた。しかし、大震災の後に何事もなかったような話をするのも不自然である。神の言葉を取り次ぐ説教者には、今、この会衆に対するメッセージを語る務めがあるからである。この二つの逆のベクトルの要求を満たすために、私は震災の意味や、震災後の世界の中での慰めや希望について、生々しい体験を語ることを避けて出来るだけ客観的に語ることにした。また、犠牲者を悼んで平安を祈ることや、残された者の癒しと慰めを祈り、支援に当たる人々に上よりの助けを願った⁴¹。

被災地における支援活動は、キリスト教思想からすると、隣人愛の実践という意味を持っている。とりわけ、学長室が主体となって始めた災害ボランティアステーションの働きは、東北学院大学の建学の精神であるキリスト教の実践と位置付けられる。参加した教員・学生は意図した訳ではないと思うが、結果として隣人愛の実践に参加することになった。キリスト教学科（総合人文学科）も、災害ボランティアステーションの働きが始まると直ぐに、学科の教員・学生に情報提供して参加を呼びかけ、教員・学生の有志が、ボランティ

³⁹ 「ドキュメント3・11」『東日本大震災 東北学院の復旧へ向けての取り組み』HP『東北学院大学』を参照。

⁴⁰ オルガンの損傷と修理の詳細については、今井奈緒子「泉礼拝堂ケルン・オルガンの被災と修復」『東北学院大学宗教音楽研究所紀要』第16号（2012年）1-8頁を参照。

⁴¹ 巻末の参考資料2及び3を参照。

アステーションを通して、被災地のニーズに応じた様々な活動に従事することとなった。また、学生によっては、所属している教会を通して支援活動に参加した者もいた。特に、キリスト教学科4年に在学中であった日本キリスト改革派東仙台教会の立石彰牧師は、自分の教会を改革派教会の仙台における支援センターとして提供し、全国の改革派教会から集まる支援物資を、ボランティアの人たちの助力を得て、近隣地域と被災の程度が大きい東松島市と石巻市に届ける活動と、被災住宅の泥かきの作業を行い、改革派系の教会に属するキリスト教学科生数名もそれを手伝った⁴²。東仙台教会は状況が一段落してからも、被災地に設置された仮設住宅を継続して支援する活動を続けている。

日本基督教団東北教区は、震災後に東日本大震災教会支援復興委員会を立ち上げて、被災した教会の復興支援活動を開始すると共に、被災者支援センターを教区センター・エマオに設置して、ボランティアを被災地に派遣する支援活動を開始した⁴³。キリスト教学科の卒業生たちの中に、この働きに積極的に参加した者もあった。

5. 震災から一年：復興・復旧と大学の課題

2012年になると、被災地にある諸大学において、地域の復興や防災のために研究機関として貢献する課題が意識され、様々な研究プロジェクトが企画されるようになった。特に、地震学による地震と津波のメカニズムの解明、防災学や都市工学・政策の見地からの研究や防災対策の提言、被災地でのボランティア活動などの課題に在仙の各大学が取り組んでいる⁴⁴。災害の科学的研究の点で他に先んじているのは東北大学であり、災害科学国際研究所を設立して、自然災害の先端的科学研究の拠点作りを目指している⁴⁵。仙台にある大学や研究機関や行政機関により構成される仙台大学コンソーシアムは、復興大学プロジェクトを立ち上げ、加盟大学が協力し合いながら、地域の復興や防災に貢献する人材の育成プログラムを提供し、また、被災地でのボランティア活動を支援している⁴⁶。東北学院大学はこのプロジェクトに、災害ボランティアステーションの活動を通して参加している。

東北学院大学独自の復興研究計画としては、「地域災害脆弱性の克服と持続的基盤形成

⁴² 巻末の参考資料4を参照。

⁴³ HP『被災者支援センター 公式ブログ』を参照。

⁴⁴ 仙台の代表的大学の取り組みの内容は、東北大学のHPや、石巻専修大学のHPや、仙台工業大学のHP等に掲載されている。

⁴⁵ 東北大学のHPを参照。

⁴⁶ 「復興大学」HP『仙台大学コンソーシアム』を参照。

を促す大学・地域協働拠点の構築」プロジェクトが立ち上げられた。去る2012年1月20日-21日には、災害克服や環境修復に関する国際会議やサテライト会議を土樋キャンパスで開催され、様々な報告や研究発表が行われた⁴⁷。さらに、学長裁量経費による企画として、「震災に関わる学長研究助成金」が設けられ、申請された10件の研究プロジェクトが採択されている。また、東北学院大学は、東日本大震災の持つ意味を様々な視点から論じた『震災学』という季刊の冊子を発行し始めた⁴⁸。

大震災の体験の記憶を記録して後世に残すことの大切さは、政府が設置した東日本大震災復興構想会議が2011年6月25日に発表した『復興への提言』の中に強調されていた⁴⁹。事態が落ち着いてくるにつれ、マスコミや色々な研究機関が、震災体験の聞き取り調査をして記録に残すアーカイブプロジェクトに取り組むようになった⁵⁰。東北学院大学では、「震災の記録プロジェクト」の一環として、教養学部地域構想学科の金菱清准教授を中心とするグループが、震災と大津波の際に被災者が体験したことの聞き取り調査を行い、『3・11 慟哭の記録』と題して出版した⁵¹。また、柴田良孝理事を委員長とする東日本大震災アーカイブプロジェクト委員会は、東日本大震災に関する教職員の体験の記憶を記録として残す企画を立て、情報収集・整理作業を行っている⁵²。

東北学院大学博物館は、博物館員である歴史学科教員の加藤幸治准教授を中心に、被災地における歴史史料等の文化財のレスキュー活動を行い、破損した建物から文化財を見つけ出して保管する作業や、汚損した史料の洗浄・乾燥などの作業を行っている⁵³。

6. 結論に代えて：復興期における宗教の役割

大規模な自然災害時に宗教がなすべき基本的務めは、被災者に避難場所や救援物資を提供して緊急支援活動を行うことと、精神的な支えを与えることと、犠牲者を追悼し祈ることである。東日本大震災の際には、キリスト教も仏教もこの任務を担った⁵⁴。全日本仏教会は震災直後の時期に、救援物資を集めて被災地に送ると共に、太平洋沿岸部地域に僧侶

⁴⁷ 『東北学院時報』第708号（2012年3月15日）1頁を参照。

⁴⁸ 東北学院大学『震災学』編集委員会編『震災学』創刊号、2012年7月を参照。

⁴⁹ 東日本大震災復興構想会議『復興への提言』（2011年6月25日発表）37頁を参照。

⁵⁰ 長坂俊成『記憶と記録 311 まるごとアーカイブス』（叢書 震災と社会）、岩波書店、2012年、「明日へ 東日本大震災 NHK アーカイブス」HP『NHK オンライン』を参照。

⁵¹ 金菱清編『3・11 慟哭の記録』新曜社、2012年、一色清編『東北学院大学 by AERA』朝日新聞出版、2012年、24-26頁を参照。

⁵² 巻末の資料を参照。

⁵³ 一色清編『東北学院大学 by AERA』朝日新聞出版、2012年、20-21頁を参照。

⁵⁴ 川上直哉「被災地の現実 宗教の立場から」『震災学』創刊号、2012年7月、122-137頁を参照。

のボランティアを派遣して、緊急に土葬された遺体や引き取り手のない遺体のために読経活動を行った⁵⁵。また、震災後暫く経つと、被災地の寺において、震災の犠牲となった檀家のための法要が連日営まれた。

また、犠牲者の慰霊のためにモニュメントとなる場所を設置するというアイデアを、東日本大震災復興構想会議の『復興への提言』が提起しており、知識人の中にも賛成する意見がある⁵⁶。鎮魂・慰霊の場所を設けることは、不慮の死を遂げた人々の魂を宥め、安らかに眠ることを祈ることを目指しており、日本の伝統的発想からの追悼行為の提案である。

キリスト教会は、被災当初は緊急支援活動の方に努力を集中していたが、会員の中に犠牲者を出した沿岸部の教会では、告別式が行われ、亡くなった信徒の平安と遺族の慰めが祈り求められた。大震災から一年経った2012年3月20日（月）午後、日本基督教団東北教区は、震災を憶えるシンポジウムを行い、その後、合同の追悼礼拝を行った⁵⁷。キリスト教会は、被災した教会の復旧に力を注ぐと共に、被災した会員のケアと亡くなった犠牲者の追悼という課題を負い続けている。

大震災の被災者を憶える祈りの課題は、日本のキリスト教世界全体で共有され、全国各地で様々な教派の人々が震災を憶える祈りを捧げた。例えば、カトリック教会や日本聖公会の指導者達は、大震災の被災者のための成文の祈りを作成し、公表した⁵⁸。礼拝学と教会音楽に関する専門誌『礼拝と音楽』は、第149号の冒頭に、小栗献神戸聖愛教会牧師が書いた「とりなしの祈り」を掲載し、被災地のために祈りを捧げた⁵⁹。

2012年3月11日（日）には、東京の四谷にある聖イグナチオ教会で「東日本大震災一周年にあたり追悼と再生を願う合同祈禱集会」（日本キリスト教協議会・カトリック中央協議会主催）が開かれた⁶⁰。大震災が発生した午後2時46分に全員で1分間の黙禱を捧げた後に、3時から岡田武夫カトリック大司教と興石勇NCC議長が合同司式により祈禱会が行われた。式では、カトリック司教や、プロテスタント牧師が分担して聖書朗読と答唱詩編を朗読し、岡田大司教が説教を担当した。また、献金（奉献）、4名の信徒らによる共同祈願、さらに被災地支援活動報告がなされて、最後に派遣の祝福がなされた。

⁵⁵ 「東日本大震災支援中間報告書」（PDFファイル）HP『全日本仏教会』を参照。

⁵⁶ 東日本大震災復興構想会議『復興への提言』（2011年6月25日発表）37頁、赤坂憲男「震災論」『仙台学』第13号（2011年）28-31頁を参照。

⁵⁷ 『教団新報』第4747,48号（2012年5月5日）2頁を参照。

⁵⁸ 巻末の参考資料5から8を参照。

⁵⁹ 巻末の参考資料9を参照。

⁶⁰ 『キリスト新聞』第3220号（2012年3月24日）、『カトリック新聞』第4138号（2012年3月18日）を参照。

東北学院大学は2012年3月11日（日）午後に、震災による犠牲者を憶える追悼礼拝とオルガンの追悼演奏を、多賀城キャンパス礼拝堂において行った⁶¹。礼拝において、聖書朗読と祈りを佐々木哲夫宗教部長が担当し、式辞を平河内健治理事長が担当した。14:46には、全員で犠牲者のために黙祷を捧げた。追悼演奏は今井奈緒子大学オルガニストが担当し、J・S・バッハの楽曲を中心に演奏した。多賀城キャンパス礼拝堂は震災後に多賀城市民の避難所として使用されていたこともあり、約300人の参加者の中には大学教職員・学生の他に、近隣住民の姿もあった。

復興期における宗教の役割は、人々に慰め・励ましを語り、未来への希望を語ることである。日本の伝統的コミュニティが生きているような地域では、神道が一定の役割を果たした。被災した神社が再建されることや、南相馬市の相馬中村神社と小高神社と太田神社の合同の祭りである相馬野馬追のような伝統的な祭りを祝うことが、地域全体の復興のシンボルとなり、人々の心を鼓舞する効果を持った⁶²。キリスト教徒は日本の社会の少数者であるので、教会の再建が地域の復興のシンボルになったり、キリスト教の祭りが被災地全体の祭りとして祝われたりすることはない。しかし、仮設住宅の住民達の要請で、牧師が仮設住宅に出掛けて行ってクリスマス礼拝を行ったという事例はある⁶³。クリスマスはたとえ世俗化した形であっても日本の社会で受け入れられ、12月の風物詩となっているからである。東北学院大学の公開クリスマスは（2011年度の説教者は山元克之 日本基督教団花巻教会牧師）、大学の教職員・学生のみならず、地域住民に対しても開かれており、地域全体に対して神の愛を証言し、希望を語る場となった。キリスト教は信徒にも信徒以外の人々の心にも届くような希望のメッセージを語る務めが与えられている。

震災の持つ意味について、日本の伝統宗教は余り多くを語らず、静かに大災害の現実を受け入れたように見える。自然の力を神格化して崇める神道は、恵みを与える一方で、時として大災害によって破壊をもたらす自然の力を畏怖し、自然と共に生きる思いを新にした⁶⁴。仏教からすると大災害は、世界の諸行無常のしるしである⁶⁵。この世への諦念を基礎とする仏教信仰は災害によって強まりこそすれ、弱まりはしない。これに対して、キリス

⁶¹ 『東北学院時報』第708号（2012年3月15日）1頁を参照。

⁶² 「東日本大震災神社復興支援」HP『神社本庁』、さらに、川村一代『光に向かって 3・11で感じた神道のこころ』晶文社、2012年、161-182頁を参照。

⁶³ この件に関しては、日本基督教団東北教区議長 高橋和人牧師の証言がある。

⁶⁴ 川村、103-114頁を参照。

⁶⁵ 山折哲雄『絆 いま、生きるあなたへ』ポプラ社、2011年、21-82頁、玄侑宗久『無常という力 「方丈記」に学ぶ心の在り方』新潮社、2011年、松島令『平成「方丈記」 3・11後を生きる仏教思想』言視社、2012年を参照。

ト教世界では、神が支配する世界の中で何故このような悲惨な出来事が起こるのだろうかという神義論的な問いが生じ、様々に議論がなされた⁶⁶。それは、キリスト教信仰が、創造主なる全能の神という神観を持っていることと、言葉によって表現することを重視していることに由来する。キリスト教は神の言葉である聖書の啓示に基づく宗教であり、伝統的に、言葉による信仰告白を重視して来た。他の宗教とは異なり、説教や論考において、震災の意味への問いは続けられることとなるが、そのことは論理と言葉を重んじるキリスト教の宿命であろう。

参考資料

参考資料1：震災直後の2011年3月16日に筆者がキリスト教史学会事務局に対して書き送った報告。

キリスト教史学会の皆さん

今回の大地震では、ご心配をお掛けしました。私たちのことを覚えて戴き、感謝します。少し落ち着いたところで、現況をお知らせしたいと思います。

3月11日（金）から5日が経過し、仙台の多くの地域で水道・電気・電話が復旧しましたが、ガスはまだ戻っていません。ガソリンや灯油や食料が不足し、時間を限定して開いている店の前には長蛇の列が出ています。JRは止まっていますが、地下鉄は一部再開しました。バスは不定期運転で動いていますが、渋滞でノロノロ運転です。自動車もガソリン不足でセーブ運転です。

仙台の各大学は緊急対策会議を開いて対応策を検討し、安全確認が済むまでは校舎を立ち入り禁止にし、会議や行事を中止や延期にしています。私が奉職する東北学院大学は本年度の卒業式の中止を決定しました。私が属するキリスト教学科も、来週に予定していた修養会や卒業礼拝・祝会の中止を決めました。目下、課題は教職員や学生の安否確認で、キリスト教学科は教員7名全員の無事、学生37名のうち34名の無事を確認しましたが、

⁶⁶ 並木浩一「ヨブ記からの呼びかけ」『福音と世界』2011年8月号24-29頁、兼子盾夫「3・11 祈れなかった私のヨブ記①」『福音と世界』2012年7月号2-5頁、「3・11 祈れなかった私のヨブ記②」『福音と世界』2012年8月号7-9頁、門脇佳吉「私を悩ませた大疑団」『パウロの中心思想』教文館、2011年、277-285頁、羽賀力「なぜ神は『悲しみの人』になられたのか」日本基督教団救援対策本部編『現代日本の危機とキリスト教 東日本大震災緊急シンポジウム』日本基督教団出版局、2011年、50-78頁、原口尚彰「東日本大震災と社会意識の変容」『人文学と神学』第1号（2011年）102-113頁を参照。

残りの3名の確認が出来ておらず、手を尽くして確認作業を進めています。津波に襲われ壊滅状態になった町の出身者もあり、確認作業は困難を極めています。無事だった教員や学生の中には、住居に損傷があるために、疎開している人達や避難所に身を寄せている人達もあり、日常に戻るには時間が掛かりそうです。

福島原発の事故には心を痛めています。学生の中には、20キロメートル以内に居住していたために、退去を命じられ、家族と共に避難所生活を強いられている者もあります。何とか科学的知識の粋を尽くして、原子炉を冷やし、最悪の事態を避けて頂きたいと願っています。

以上、仙台の現況をお伝えしました。どうぞ、被災者や救援活動が続ける人々のために祈り下さい。

原口尚彰

参考資料2：説教「信仰の試練」

2011年5月30日 土樋キャンパス礼拝説教

「あなたがたを襲った試練で、人間として耐えられないようなものはなかったはず。神は真実な方です。あなたがたを耐えられないような試練に遭わせることはなさらず、試練と共に、それに耐えられるよう、逃れる道を備えていてくださいます」(第一コリント10:13)

本年三月十一日に起こった東日本大震災から、ほぼ二ヶ月半の時間が経過し、私たちの日常生活もやっと落ち着きを取り戻して来ました。人命救助や緊急避難の段階を過ぎて、復旧・復興の途上にある段階に達した時点で、震災体験の意味について聖書に基づいて考えてみることは意味があることではないかと思えます。

今回の大震災は近代日本を襲った最大の地震であり、我々の予想を遙かに超えたものであったと言えます。この未曾有の大震災の結果、建物や道路や町が破壊され、特に津波に襲われた石巻や気仙沼や南三陸町のような海沿いの地域の町は、かつてそこに立っていた建物の土台だけを残して廃墟になりました。そのために多くの人たちが命を落とし、行方不明になりました。生き残った人たちも、家をなくして避難所暮らしを強いられる人たちがあるし、自分の家は無事であった人たちもしばらくは電気も水道もなく、非常用の食料や水で暮らす耐乏生活を余儀なくさせられました。また、福島第一原発近隣地域に住んで

いた人々は、津波によって引き起こされた原発事故による放射能漏れのために、町毎村ごと避難を強いられ、現在に至っています。

さて、この大災害は普段自然を破壊し、資源を浪費する生活を続けていく人間への神の裁き・警告であり、私たち人間はそのことを反省すべきであるという義論が一部にありました。これは、大震災を天罰と捉える考え方で、今回は特に、東京都知事石原慎太郎が口にし、宮城県知事の抗議を受けて引っ込みました。石原慎太郎は3月14日に、東日本大震災について、「日本人のアイデンティティーは我欲。この津波をうまく利用して我欲を1回洗い落とす必要がある。やっぱり天罰だと思う」と述べました。これに対して、被災地の宮城県知事村井嘉浩が、「塗炭の苦しみを味わっている被災者がいることを常に考え、おもんばかった発言をして頂きたい」と抗議したので、石原は3月15日に、「言葉が足りなかった。撤回し、深くお詫びする」と述べて謝罪しました。

関東大震災の時には天譴論が、銀行家の渋沢栄一や宗教者である内村鑑三によって唱えられました。天譴論とは、災害は天が人間に下した譴責であるという議論のことであり、キリスト教思想家の内村鑑三は、『主婦之友』1923年10月号に寄せた、「天災と天罰及び天恵」という文章の中で、渋沢の発言に賛意を表し、「実に然りであります。有島事件は風教墮落の絶下でありました。東京市民の靈魂は、其財産と肉体とが滅びる前に既に滅びていたのであります。斯かる市民に斯かる天災が臨んで、それが又は天罰として感ぜらるゝは当然であります」と書きました。

しかし、こうした震災天罰論を聞くと、私たちが大きな違和感を憶えるのも事実です。文明生活を享受している私たち現代人が、繁栄の中で私利私欲に走ったり、退廃的になってモラルが低下することは事実であり、自ら反省することは大事ですが、そのことは震災が起こったという事実との間に本当に因果関係があるのでしょうか？特に、今回の震災は日本の繁栄と奢りの中心であった首都圏ではなく、過疎地で高齢化が進む東北地方を襲ったのでありました。津波の被害が特に大きかった三陸地方などは漁民が海で魚を獲って暮らす場所であり、富や奢侈とは縁遠いところであったことを考えれば、災害と人間の罪悪や物欲と結び付ける因果関係は完全に破れているのであります。

震災の中で宗教が語るべき事は裁きではなく、慰めや希望ではないでしょうか。震災のために命を亡くした数多くの人たちの死を弔い、天における平安を祈るのはまず持って宗教がしなければいけないことです。生き残った人たちは、愛する者を突然に失った悲しみの中のうちにあると同時に自分たちが生き残ったことや、身内を助けることが出来なかったことへの罪責感を持っています。このような人々に対して、残された命の大切さを語り、

慰めや励ましを語ることこそが宗教者の使命でしょう。

信仰の立場からすると震災は、神が人間に与える人生の試練の一つということになります。試練は神が私たちに与える苦難ですが、試練によって信仰を放棄する危険があると共に、試練を通して信仰が練り清められて深まることもあります。今日の聖書は、著者の使徒パウロや初代教会の人々が遭遇した信仰の試練としての苦難と希望のことを問題にしています。信仰によって私たちは人生の苦難を避けることは出来ませんが、神への信仰は苦難を神の定めとして受け入れ、乗り越える力を与えるとは言えるのではないかと思います。人間の目には解決が容易に見いだせないような時にも、神は私たちを見捨てず、共にいて解決を与えて下さるという確信が、人間に希望を与え、再び立ち上がる力を与えるのではないかと思う次第です。

参考資料 3：説教「神への問い」

2011年6月7日 土樋キャンパス礼拝

東北学院大学『説教集』第16号（2012年3月発行）89-93頁に収録

「どうか、わたしの言うことを聞いて下さい。

見よ、わたしはここに署名する。

全能者よ、答えてください。

わたしと争う者が書いた告訴状を

わたしはしかと肩に担い

冠のようにして頭に結び付けよう。

わたしの歩みの一步一步を彼に示し

君主のように彼と対決しよう。

わたしの畑がわたしに対して叫び声をあげてその敵が泣き

私が金を払わずに収穫を奪って食べ

持ち主を死に至らしめたことは、決してない。

もしあるというなら

小麦の代わりに茨が生え

大麦の代わりに雑草が生えてもよい」（ヨブ 31：35-40）。

旧約聖書のヨブ記は、義人ヨブの苦難を記した書物で、神が創った世界の中で、罪のな

い人間が何故苦しい目に遭うのかという主題をめぐる長大な戯曲となっています。ヨブは元々大変敬虔な人物で、神を敬い、悪を避ける生活を送っていました。1章2節の記述によると、ヨブには七人の息子と二人の娘があり、しかも、ヨブは羊やらくだや牛やロバを沢山所有する富豪であり、何一つ不自由のない生活を送っていました。ところが、天上で神とサタンが一つの賭を行ったことで状況は一変します。サタンは神に対し、利益がないのに人が神を敬うことがあるだろうか？ ヨブが神を敬うのは、神の祝福にされて財産を与えられているからであり、財産が奪われれば、神を呪うに違いないと言います。神はサタンにしたいようにするが良いと言くと、サタンは、災難をヨブに下し、ヨブの財産を奪い、子供たちを死なせました。しかし、ヨブは、「わたしは裸で母の胎を出た。裸でそこに帰ろう。主は与え、主は奪う。主の御名はほめたたえられよ。」と言って、神を非難することなく、運命を甘受しました（1：21）。

次に、サタンはヨブに重い皮膚病を送りましたが、それでも彼は、「わたしたちは、神から幸福もいただいたのだから、不幸もいただくのではないか。」と言って、神を呪うことをしませんでした（2：10）。

ヨブの災難を聞いて、エリファズ、ビルダド、ツォファルという三人の友人が慰めるために遠くからやって来ます。この三人の友人とヨブの交わした対話が、ヨブ記3章から28章までの内容となっています。友人たちは、神は正義を嘉し、不義を罰するという伝統的な勧善懲悪の考え方に立っており、ヨブがこれ程の不幸に見舞われるのは何か大きな罪を犯しているに違いないと考え、ヨブに対して罪を隠さずに認めるように善意から勧めます。しかし、ヨブには全く身に覚えがないことなので、友人たちに反論することになり、両者の間に激しい論争が起こります（ヨブ記29-30章）。結局のところ、友人たちはヨブを説得することが出来ないで、黙ってしまいます。友人たちを言い負かしたヨブは、最後に神に対して激しい調子で問いかけます。先程読んだ箇所はその結びのところですが、そのポイントは、自分は一切不義を働いていないのに、神は何故災難を下すのかということです。

さて、神が創造した世界において罪のない者が何故悲惨な体験をしなければならないのか？ ということは、繰り返し問われて来ました。今回の大震災においては、一万五千人以上の人々が犠牲になり、九千人近い人たちが行方不明となっています。生き残った人たちの中には、家族を失い、家を失い、工場や商店を失い、身よりも財産もなくなって避難所に身を寄せている人たちがいます。被災した人たちが、被災しなかった人たちよりも罪深かったかということ、勿論、そのようなことはなく、住んでいた地域が震源地に近かった

り、海岸沿いで津波の影響を直接に受ける場所であったりしたに過ぎません。災害という自然現象は、人間の倫理的資質に関係なく襲って来るものであります。

しかし、全能の神が創造主であり、世界はすべて主の御手の内にあるのなら、何故このようなことが起こるのか、罪ない人が被災し苦しむのはどうしてなのかという問いは、ヨブに限らず人の心の中に絶えず生じて来ます。実際に同様な問いを東日本大震災に関して、日本に住む少女がローマ教皇に問うたところ、教皇は率直に自分も同じような疑問を持っていると述べました。良く考えてみると、この問いは、「エロイ、エロイ、レマサバクタニ（我が神、わが神、何故わたしをお見捨てになったのですか?）」という十字架上のイエスの問いでありました（マルコ 15: 34）。神の子であり、罪を犯したことの無いイエスが、何故、捉えられ、拷問を受け、断罪され、極悪人のように十字架刑を受けなければならなかったのか?ということは大きな謎であり、不条理でありました。それは、そのような不条理な苦しみの中にある人間と共にイエスは歩み、その苦しみを共に担い、共に問い続けて下さるということに他ならないと思います。「悲しむ人々は幸いである。彼等は慰められるであろう」（マタイ 5: 4 私訳）という主イエスの言葉を頼りに歩んで行きたいと思えます。

**参考資料 4：立石彰牧師（日本キリスト改革派東仙台教会）より、
改革派諸教会に宛てた活動報告**

地震と津波が発生してから早くも三週間が過ぎました。これまでの日々を振り返って落ち着いて皆様に報告するまでにはもう少し時間がかかると思います。しかしながら、ボランティアの方々に派遣して頂いている教会として、皆様からの強力な祈りの援護と貴い多くの献げ物に対する心からの感謝を少しでもお伝えしたいと思ひ、一言の感謝と簡単な報告をさせていただきたいと思ひます。

こちらの状況は、時間の経過と共に物凄い早さで変化しています（私自身が把握しているのは主に東仙台近隣と東松島市と石巻市）。昨日と今日とでは状況がまるで違うということが何度もありました。前日に「何でもいいから持っている物資・食糧を持ってきてください」と依頼があった避難所に次の日に物資を届けると「もう十分届いたので他の避難所に届けてください」ということもよくあります。

また、様々なギャップに違和感を強く感じています。同じ仙台市でも、同じ区でも、場所によって被害の状況はまったく異なります。道路に立って北を向けば以前と同じ街並があるけれども、同じ所に立って南を向けば津波によって街が一変しているという所もあり

ます。一つの職場の中に、電気・水道・ガスが復旧した地域に住む方と、復旧のめどさえつかず大変な生活を余儀なくされている方がいます。さらに、石巻市街までは物資が届いているけれども、それよりも北東の地域や少し外れた牡鹿半島の避難所には十分には届いていないという状況もありました。

このような変化とギャップの中で、それでも、日々なすべきことと、それをなすための力が豊かに与えられています。愛する兄弟姉妹の皆様、東仙台教会の活動のためにも、執り成しの祈りを献げてくださっていることを覚えて、心からの感謝をお伝えいたします。私たちは今、「祈られている！」という事実と、確かにイエス・キリストが祈りを聞いて慰めと支えと導きを与えてくださっているという事実を一日一日の歩みの中で実感し、皆様の祈りに支えられ、「主は生きておられる！」という一つのことを心深くに教えられています。また、貴い贈り物を送ってくださった方々に対しても、この紙面を借りて感謝の気持ちをお伝えさせてください。日々全国から届けられる段ボールに入った贈り物を、私たちは大きな喜びをもってしっかりと受けとっています。その内容や分量についてはもちろんのことですが、それ以上に、どなたかが、何を送ろうか迷ってくださった時間、何が必要なか考えてくださった時間、いろいろなお店に足を運んでくださった時間、贈り物を丁寧に段ボールに入れてくださった時間、それを宅急便屋さんや教会に運んでくださった時間・・・、そのような一つ一つの時間を想うと、私たちは自然に元気と力が湧き出てきます。そして、それらの贈り物を教会の方々や様々な避難所にいる方々に届けた時に、受け取ってくださった方々の大きな喜びを私たちは目の当たりにしています。今日までに受け取った数え切れない人たちからの「ありがとう」という言葉を皆様にもお伝えしたいと心から願っています。

最後に、ボランティアで東仙台教会に来てくださっている方々の活動についてですが、避難所などに物資を届ける活動の他に、津波の被害を受けた石巻教会や教会員の家への復旧作業などを、ボランティアの方々と教会員との奉仕によって行っています。今の段階では、まだまとまった文章にはならず、添付しています何枚かの写真によってのご報告とさせていただきます。

心からの感謝をこめて。

2011年4月2日
東仙台教会 立石彰

参考資料5：「東日本大震災一年にあたり追悼と再生を願う合同祈祷集会」
 (日本キリスト教協議会・カトリック中央協議会主催)において捧げられた祈り

共同祈願 (連祷)

(司式者の言葉に続いて自由に祈ることができる。下記の例文を利用してよい。)

司式者：わたしたちと悲しみを共にしてくださる主キリストと共に父である神に祈りましょう。

先唱者：神よ、わたしたちの声を聞いてください。それは、不慮の死を迎えた犠牲者たちの声だからです。(自由な言葉で続ける)

会 衆：主よ、わたしたちの祈りを聞き入れてください。(沈黙)

先唱者：神よ、わたしたちの声を聞いてください。それは、愛する人を失った悲しみの中にある人たちの声だからです。(自由な言葉で続ける)

会 衆：主よ、わたしたちの祈りを聞き入れてください。(沈黙)

先唱者：神よ、わたしたちの声を聞いてください。それは、放射能の脅威によって故郷から離れなければならなくなった人々の声だからです。(自由な言葉で続ける)

会 衆：主よ、わたしたちの祈りを聞き入れてください。(沈黙)

先唱者：神よ、わたしたちの声を聞いてください。それは、被災した方々に寄り添うために心を尽くしている人々の声だからです。(自由な言葉で続ける)

会 衆：主よ、わたしたちの祈りを聞き入れてください。(沈黙)

司式者：恵み豊かな父よ、苦しみと悲しみの中からあなたに叫ぶわたしたちを顧みてください。あなたの慈しみ深いはからいに、いつも心から信頼することができますように。わたしたちの主イエス・キリストによって。

会 衆：アーメン。

「3・11 東日本大震災を心にとめ、死者の追悼と被災者の慰めと被災地の再生のための祈祷礼拝」(2011年9月11日、日本キリスト教協議会・カトリック中央協議会主催)において捧げられた祈り

司式者：わたしたちの父なる神さま。

あなたの恵みを慕い求めます。

半年前の東日本大震災において、多くの命が失われ、また大勢の被災者が苦しみ

と悲しみの中に置かれました。今も不安と恐れの中に立ちつくしています。また、深い闇と絶望がわたしたちを取り巻いています。

主よ、どうかわたしたちに聖霊を注ぎ、とりなし、恵みの光で満たしてください。み言葉をもって、わたしたちを励まし、互いに喜んで仕え合い、新しい歩みを進めていくことができますように、この礼拝を祝福してください。

み子イエス・キリストのみ名によって祈ります。

会衆：アーメン。

参考資料6：2011年4月20日に発表された、
日本カトリック司教協議会会長 池内潤大司教の祈り

あわれみ深い神さま、
あなたはどんな時にも私たちから離れることなく、
喜びや悲しみを共にして下さいます。
今回の大震災によって苦しむ人々のために
あなたの助けと励ましを与えて下さい。
私たちもその人たちのために犠牲をささげ、祈り続けます。
そして、一日も早く、安心して暮らせる日が来ますように。
また、この震災で亡くなられたすべての人々が
あなたのもとで安らかに憩うことができますように。
主キリストによって。アーメン。
母であるマリアさま、どうか私たちのために祈りください。
アーメン。

参考資料7：「東日本大震災（東北地方太平洋沖地震）のための祈り」

（日本聖公会主教会議が2011年4月20日に発表）

慈悲の神、天の父よ、
東日本大震災によって命を失った人びとの死を悼みます。
どうか主の深い慈しみのうちに、この人びとを安らかに憩わせてください。また、愛する者を失って悲しむ人びとがみ力により、あなたの愛の慰めのうちに生きることができますように。

この震災によって離散させられた人びと、住まいを失った人びと、傷つき病のうちにある人びと、弱い立場に置かれている人びと、ことにしょうがいのある人びと、ご高齢の人びと、外国からの人びとを愛のみ手をもって守り支えてください。また悲しみ、悩み、苦しみ、孤独のうちにある人びと、希望を失いかけている人びとを慰め、生きる勇気と希望をお与えください。

今、避難生活を余儀なくされている人びとや不自由な生活を強いられている人びとに、必要な保護が与えられますように。また、震災復興のために働くすべての人びと、ことに危険な作業に従事する人びと（、——）を導き支えてください。そしてわたしたちが心を合わせて祈り、いつもともにおられる慰めの主のみ姿を見出すことができますように。

これらの祈りを主イエス・キリストのみ名によってお献げいたします。アーメン

参考資料 8：東日本大震災（東北地方太平洋沖地震）のための嘆願
（日本聖公会主教会が 2012 年 3 月 11 日に発表）

司式者

慈悲の神、天の父よ、東日本大震災によって命を失った人びとの死を悼みます。どうか主の深い慈しみのうちに、この人びとを安らかに憩わせてください。また、愛する者を失って悲しむ人びとがみ力により、あなたの愛の慰めのうちに生きることができますように

会衆

主よ、お聞きください

司式者

この震災によって離散させられた人びと、住まいを失った人びと、傷つき病のうちにある人びと、弱い立場に置かれている人びと、ことにしょうがいのある人びと、ご高齢の人びと、外国からの人びとを愛のみ手をもって守り支えてください

会衆

主よ、お聞きください

司式者

悲しみ、悩み、苦しみ、孤独のうちにある人びと、希望を失いかけている人びとを慰め、

生きる勇気と希望をお与えください

会衆

主よ、お聞きください

司式者

今、避難生活を余儀なくされている人びとや不自由な生活を強いられている人びとに、必要な保護が与えられますように。また、震災復興のために働くすべての人びと、ことに危険な作業に従事する人びと（、——）を導き支えてください

会衆

主よ、お聞きください

司式者

わたしたちが心を合わせて祈り、いつもともにおられる慰めの主のみ姿を見出すことができますように

一同

これらの祈りを主イエス・キリストのみ名によってお献げいたします アーメン

参考資料 9：小栗献「とりなしの祈り」

（『礼拝と音楽』第149号（2011年5月1日）2-3頁より転載）

神よ、深い悲しみと混乱と動揺の中からあなたに祈ります。

私たちの祈りをお聞きください。

本当の力をもっておられる神よ

人の理解を超えた巨大な自然の力によって打ちのめされ、
痛めつけられ、今もその力におびやかされている人々のために祈ります。
主よ、すべての力を越えて支配されるあなたの力を、
弱り果て、疲れ果てた人々に与えてください。

人間の弱さをすべて知っておられる神よ

盤石であるかのように思われた土台が揺らぎ、
積み上げてきた人生が崩れ落ち、希望と夢を失い、
恐怖と寒さと無力感に震えている人々のために祈ります。
人の心のすべてを知っておられるあなたが、
その腕で人々を抱きしめてください。

うちひしがれた人をご自身のもとへとお招きになる神よ

突然の津波によってすべての財産と家と故郷と、
そして愛する人々を暴力的に奪い取られてしまった人々のために祈ります。
その人が泣く時共にいてください。
それでもなおあなたが、生き続けることへと招いてください。

私たちの重荷を背負ってくださる神よ

すっかり混乱し、動揺し、氣力を失い、
将来が見えずに深い絶望の中に座り込んでいる人々のために祈ります。
あなたがみ手をもって立ち上がらせてください。
そしてあなたと共に新しい一歩を踏み出させてください。

美しい、調和のうちにある自然をつくられた神よ

人間の傲慢によって傷つけられ、
汚染されていく大地と空気と水のために祈ります。
そして住み慣れた故郷を失おうとしている人々のために祈ります。
あなたが与えてくださった自然と命を守ることも、
自分の生活を優先させてきた私たちの罪を許してください。
今、私たちの故郷は、
人が住むことが出来ない土地に変わり果てようという
重大な危機の中にあります。
神よ、この世界をお守りください。
砂漠に花を咲かせられたあなたが、この世界を新しくしてください。
そして私たちの生き方をも、未来に向かって新たなものとしてください。

愛であられ、私たちに愛せよ、と言われる神よ

困難にある人々のために心を痛み、その人たちのために祈り、
連帯して生きようとする日本の、そして世界中の人々のために祈ります。
そしてそのすべての働きのために祈ります。
私たちの絆を強めてください。
私たちが共に生きようとする願いと、そのための行動を祝福してください。

希望なる神よ

希望を見出すことができずにいるすべての人々のために祈ります。
主よ、私たちが信仰の内にはっきりと知ることができますように。
たとえこの世界に希望がないように見えようとも、
あなたこそが私たちの希望であることを。
そしてあなたは、もっとも大きな苦しみと不安の中に、
もうすでにおいでになっているということ。

全能の神、主よ

あなたに信頼します。
あなたこそが私たちの微動だにしない土台なのです。
今、私たちが為すべきことを、私たちに知らしめてください。
そしてそれを為すための信仰と愛と力と勇気を私たちに与えてください。
あなたが私たちの行く道を備え、
そしてあなたが、私たちと共に歩んでください。

主よ、私たちの祈りをお聞きください。

(2011年3月17日)